金沢龍谷高等学校 中等部
中等部通信
junior high school communication
vol. 37
令和４年10月21日（金）

歎異抄を　これから

今日は歎異抄第4条を紹介します。

これから、週に少なくとも１条というペースで紹介してゆけば、今年度内に『歎異抄』を全て紹介できるのでは、と考えました。

第31号にも掲載した、本校創設者石原堅正先生の『心の学園』を、自分のものとして理解するためにも、『歎異抄』に、しっかりと向き合おうと思います。

『心の学園』

われわれは生きております。しかしよく考えてみると、実は生かされて生きているのであります。

たとえば、私は空気一吸、水一滴も自分で創造した覚えはありません。しかるに、空気も水も、電気も太陽も、全力をあげて私を生かしてくれています。不思議と申すほかありません。何だかそこに感謝の念がわいてまいります。

今ここに、私が人間として生かされ、生きているという不思議さに感動できる心をはぐくむのが、心の学園です。

歎異抄　第四条

仏教には聖道門と浄土門の違いはありますが、仏教の根本である慈悲についても、聖道門と浄土門には違いがあります。聖道門の慈悲といいますのは、われわれが他の生きとし生けるものをかわいがり、その生けるものをいとおしく思い、それを育てようとする慈悲であります。しかし、われら無力な人間の世界にありましては、われらの思うがままに、徹頭徹尾他の生けるものをたすけることは極めて困難なことであります。逆に浄土門の慈悲といいますのは、念仏をして早く仏さまになって、仏の持っている大きなる愛の心、大いなるあわれみの心ですもって、思うよう生きとし生けるものを救いとり、生きとし生けるものに利益を与えることをいうのでありましょう。この世の中でわれらかどんなに他の生けるものをいとおしい、かわいそうだと思っても、われわれの思いどおり、いとおしいものを救うことができませんので、そういう慈悲は結局首尾一貫しない慈悲であります。だから、この世のことは業にまかせて、ひたすら念仏するのが、首尾一貫した大きな慈悲でありましょう。

私は、朝の礼拝の時、週に一度は講堂で行おうと意識してきました。

ここ最近は、かなり朝も慌ただしくて、自分のデスクの前で、手を合わすことが多いのですが、この講堂で合掌して、『今日一日、報恩感謝の心で過ごします』と、唱えたとき、「がんばらなければ」という気持ちと、「まもっていただいているから」という２つの気持ちがわいてきます。

「まもっていただいているから」という気持ちを持つようになったのは、この学校にきてからです。

歎異抄にある『本願他力』に、ほんの少しでも、自分自身を近づけることができたからかな、なんてうぬぼれている自分がいます。